

2023 年 5 月 21 日（日）「目覚めよ！ ～眠りの中にあったサルディス教会～」

ヨハネの黙示録 3:1-6

1 サルディスにある教会の天使に、こう書き送れ。『神の七つの霊と七つの星を持つ方が、こう言われる。「私はあなたの行いを知っている。あなたが生きているとは名ばかりで、実は死んでいる。2 目を覚ませ。死に瀕している残りの生活を立て直せ。私は、あなたの行いを、私の神の前で完全なものとは認めないからである。3 それゆえ、どのように教えを受け、また聞いたかを思い起こして、それを守り通し、かつ悔い改めよ。もし、目を覚ましていないなら、私は盗人のように来る。私がいつあなたのもとに来るか、あなたには決して分からない。

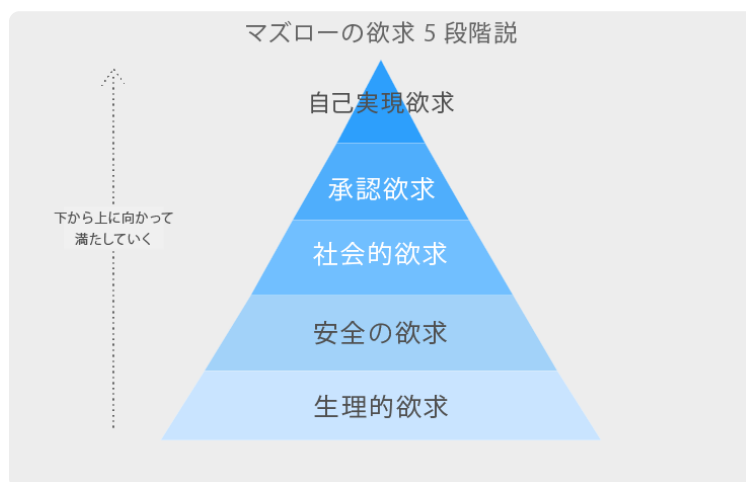
4 しかし、サルディスには、僅かながら自分の衣を汚さなかった者たちがいる。彼らは、白い衣を着て私と共に歩む。そうするにふさわしい者たちだからである。5 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして私は、その名を決して命の書から消すことはなく、その名を私の父と天使たちの前で公に言い表す。6 耳のある者は、霊が諸教会に告げることを聞くがよい。』

【序論】

アメリカの心理学者、アブラハム・ハロルド・マズローが提唱した「欲求5段階説」というものを過去に学んだことがあります。彼によると、人間は下層の欲求が満たされないと次の段階の欲求に進むことができないと言われます。図のように、まず「生理的欲求」が満たされなくては「安全の欲求」どころではない。「安全の欲求」が満たされなくては「社会的欲求」が生じない。このように、人間は低次の欲求が満たされるほど高次の欲求へ進んでいくと考えられています。

さて、今日の話はこれと直接的に関係があるというわけではありませんが、「眠り」

という問題が出てきますので、少しふれておきたいと思いました。「生理的欲求」の一つに「睡眠欲」が含まれているのですが、これは「食欲」や「排泄欲」などと並んで、生物が生命維持のために最も必要としている欲求です。特に「睡眠」というものは、人間の活動に最も大きな影響を及ぼします。誰もが経験してきたことだと思いますが、昼食後の授業というのは寝落ちしやすいもので、睡魔に取り憑かれると抵抗するのが困難になります。吸い込まれるように眠りに誘われていく。睡魔との戦いは、霊的生活にもあるようなのです。



【本論】

本論 1. サルディスという町

サルディスにある教会の天使に、こう書き送れ。『神の七つの霊と七つの星を持つ方が、こう言われる。(3:1a)

まずはサルディスという町について調べてみましょう。



この町は、先のティアティラ (2:18-29) の少し下 (南東) 55km に位置し、やや内陸部にあります。現代におけるトゥルグトル近郊だと思われます。この町は紀元前7～6世紀にリュディア王国の首都として栄えました。毛織物業や金細工などが盛んで、富と名声を誇っていたようです。

地形的に変わっていて、絶壁に囲まれた自然の要塞都市で、攻め込まれる隙はまずないと高をくくっていました。しかし、そんな気の緩みから、前549年にはペルシャによって攻略され、更にその300年後にはシリアによって陥落させられました。いずれも断崖絶壁をよじ上ってきた兵士によって不意をつかれたようです。そして、前133年にはローマの支配下に置かれました。

宗教的には、「神々の母」と呼ばれた大女神ティベリウスの寺院があっただけでなく、皇帝礼拝も盛んに行なわれていたようです。その町の市民は、放縦と不道徳とで悪名高かったと言われます。このような町にあったサルディス教会は、道徳面で相当影響を受けていたようで、教会内にも世俗の価値観が深く染み付いていました。

本論 2. 死んだ教会

『神の七つの霊と七つの星を持つ方が、こう言われる。「私はあなたの行いを知っている。あなたが生きているとは名ばかりで、実は死んでいる。(3:1b)』

七つの教会のうちのほとんどが何らかの賞賛から入っているのに対し、サルディスの教会は厳しい叱責から始まっています。「生きているとは名ばかりで、実は死んでいる」という指摘の恐ろしさは、霊的現実というものが人の目に見えにくい事実に基づいているでしょう。この教会は経済力もあり、それなりに信者も集まっていたのかもしれませんが。礼典も執行され、聖書も朗読されていた。一見健全そうに見える教会でしたが、実は死んでいたということです。

このような指摘を受けるのは怖いことです。人は霊的に死んだ状態にあるとき、そのような現実気づきにくいのです。それは一挙にそうなるというより、ジワジワと魂が罪に蝕まれていき気づけばキリストと無縁の生活をしていたということが多いからです。その人の内では、最初のうちは何らかの良心の呵責を覚えていたり、これではマズいのではないかという思いがあるのですが、心の声を無視し続けているうちにいつの間にか墮落の一途を辿っているということがある。しかも、それでも教会生活を継続してはいるのです。自分の身に何が起きているのかが当事者にはなかなか分からないのが、霊的衰退、キリストとの関係の薄弱化です。

「死んでいる」という言い方は大変厳しい。これは、神からもキリストからも離れてしまっている状態だということ。教会レベルでキリストを見失ってしまっている。神の義、キリストの聖がない。礼拝が形骸化し、いのちがないのです。御言葉は語られているのですが、表面的で、何か宙に浮いていて、人の心に切り込んでいく力がない。サタンがどのように教会を崩していくか、そこには様々な手法があります。教会指導者を罪へと誘って群を傷つけ、ガタガタにすることもある。異端を忍び込ませ、福音の真理を曲げさせることもある。あるいは、ほとんど誰も気づかないところで世と同化するように働きかけることもあります。サルディスの教会は、まさに誰も気づかぬところで土台を崩され、もはや教会が教会たり得ないところにまで引き摺り下ろされていたのです。

ヨーロッパのあるカトリック教会の様子が動画で紹介されているのを見たことがありますが、あまりの墮落ぶりに私は衝撃を受けました。教会内で悪魔崇拝のようなことが公然と行なわれているのです。悪魔を模したファッションショーがあからさまに繰り広げられているのですが、それを見ている信徒と思しき人々はそれが何を意味するのか全く気づいていない様子。これほどの背信行為に誰も気づかなくなっている。サルディスの教会はそのような状態にあったのではないかと私は想像しています。

本論 3. 目を覚ませ

目を覚ませ。死に瀕している残りの生活を立て直せ。私は、あなたの行いを、私の神の前で完全なものとは認めないからである。(3:2)

「目を覚ませ」という呼びかけが繰り返されていきます。何か、夢見る人が現実との境目で聞いている音のような響きで迫ってきたのでしょうか。眠りこけている人、泥酔して起きたくない人に、誰かが声をかけている。どこかで聞いたことのある声だ。どこだっけ。思い出せない。母親だっけ。違う。そうだ、教会に通い始めた頃に聞いた声だ。主イエスの声だ。そのようにして、だんだんと夢から醒めていくのでしょうか。

ジョン・バニヤンという作家による『天路歷程』という物語がありますが、主人公の「伝道者」は救いを求めて旅に出かけます。その道中でいろんな人と出会うのですが、彼は幾度となく偽りの道へと誘われそうになります。ある道で見かけた人々は、深い眠りの中にあり、起きる気配はまったくありません。これは、信仰者の「霊的眠り」を指しているのでしょうか。この世界には、信仰者を眠りへと誘う甘い香りが漂っている。それを嗅いでいると、いつしか意識が朦朧としてきて、ボーッとなってくる香りです。信仰生活の本質を見失わせる様々な「香り」があります。

私は『天路歷程』の挿絵を描いているロバート・ローソンの絵が好きなのですが、眠りこけている人々の様子が面白おかしく描かれています。



「目を覚ましておれ」という主イエスの呼びかけは、実は福音書の中にも出てきました。十字架に架かれる前夜、主イエスは三人の側近の弟子を連れて、よく祈っておられたゲッセマネの園に行かれました。主は弟子たちに祈りの加勢を求めておられましたが、主が身悶えして祈っているとき、弟子たちは眠りこけてしまいました。何度も主が起こされたにも拘らず、弟子たちは起きていられませんでした。そして、このような無防備な状態のところに敵が現れてしまったのです。もし彼らが目覚めて祈っていたなら、その後の行動は違っていただかもしれません。眠りというものは、人の生理的な欲求の最も強い部分ですから、彼らを責めることはできないでしょう。私たちもまことに眠りに誘われやすいのです。肉体的にだけでなく、霊的にもそうなのです。霊的に目覚めるためには、福音のことばを聴かなくてはなりません。この魂を揺り動かす聖霊の語りかけが必要なのです。

それゆえ、どのように教えを受け、また聞いたかを思い起こして、それを守り通し、かつ悔い改めよ。もし、目を覚ましていないなら、私は盗人のように来る。私がいつあなたのもとに来るか、あなたには決して分からない。(3:3)

福音の原点に立ち返り、最初に教わり心に受け入れた救いのメッセージを、真新しい心で聞く必要がある。ここでは「思い起こせ」「守り通せ」「悔い改めよ」と、三つの動詞が出てきます。いずれも「目を覚ませ」と関連していますが、「思い起こす」とは信仰の師から聞いた教えを想起すること、「守り通す」とは聞いたことばを忠実に保持すること、「悔い改める」とは神に対する姿勢を根本的に改めること。眠りのうちにある人の目を覚まさせるのは、御言葉が語られることと聖徒のとりなしの祈りです。

主イエスは、もし目覚めていないなら、盗人のように来ると言っておられます。これは最後の審判のことではなく、サルディスの教会を裁くために個人的に来られるということです。それがいつだかは知らされない。いつ主と出会ってもいいように備えているようにと言われているのです。主イエスは様々な譬をもって、時の切迫性を訴えておられます。

本論4. 衣の汚さなかった者

しかし、サルディスには、僅かながら自分の衣を汚さなかった者たちがいる。彼らは、白い衣を着て私と共に歩む。そうするにふさわしい者たちだからである。(3:4)

末期的な状態にあったサルディスの教会にも、信仰に立ち続けた人々が一握り残されていました。「自分の衣」とは、内面的な聖さを表すものでしょう。その人が天に属する者であることを言い表しています。世の終わりのとき、贖われた者たちは「白い衣」を着て主の御前に出ると言われています(6:11、7:9、13、19:14)。信仰を捨てないで歩み続ける人は、既にそれを身に纏っているのです。それは、キリストを着ていることにほかなりません。

勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして私は、その名を決して命の書から消すことはなく、その名を私の父と天使たちの前で公に言い表す。(3:5)

この節で印象的な「命の書」という表現は、神の民の名前が書き記された天の名簿のことでしょう。信仰が与えられた人の名前は既に神の御手によってこの名簿に書かれているというのです。しかし、これも私たちは目で確認することはできず、そうであると信じて歩むほかありません。実際、主の御前に出るとき、名前が呼ばれないことほど恐ろしいことはない。私たちは自信を持つということはできませんが、主の憐れみにすがり続けることはできます。実は、それこそが信仰なのです。自分の弱さを認め、主に祈り続けるならば、その人は常に赦しの下に置かれているでしょう。むしろ、俺は大丈夫だと思っている高ぶりが一番危ない。眠った状態とは、開き直った状態、救いを求めなくなった状態を指すと思われます。祈ることを忘れ、この世の価値観にどっぷりと浸かりきった生活です。

「命の書」は、旧約聖書の中でも何度も登場していました(出 32:32、詩編 69:29、イザヤ 4:3、ダニエル 12:1)。私たちが真に喜ぶべきことは、この「命の書」に自分の名前が書き記されていることであると、主は弟子たちに教えておられます。

しかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。(ルカ 10:20)

【結論】

信仰者が真に求めるべきものが再確認されました。私たちが大事にしているものとは何でしょう。もしそれが見えなくなっているとしたら、私たちももしかしたら霊的眠りの中にあるかもしれません。私たちが第一としているものとは何か。主は天に属するものに目を向けるよう、常に語りかけておられます。自分の霊的状态を確認するには、私たちが何を人生の最優先事項にしているかを見ればよいのです。もしそれが「地上のもの」であるならば、注意が必要です。信仰、希望、愛、御霊の実、天において神に喜ばれることを目的として歩んでいきたいと思えます。

【祈り】

常に信者との心の交流を求めておられる天の父なる神様。私たちの心の向かっているところとはどこでしょうか。この人生で優先しているものが何であるかが問われました。それが永遠に属するものでありますように。私たちの霊を眠りへと誘う多くのものが存在します。それらに目を向けることなく、主イエスとの交わりのうちに目覚めていることができるようお助けください。もし眠り込んでいるならば、揺り動かしてでも目覚めさせ、本来あるべき位置に戻ることができるよう、御言葉によって語りかけてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
個々の教会の状態を知り、それにふさわしく声をかけ給う、父なる神の愛、
眠りの中にある者を起こし、ご自身との交わりのうちに引き戻し給う、主イエス・キリストの恵み、
世の誘惑から遠ざけ、神の国とその義とを第一とさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。